

戦後70年特別企画展

見て・読んで・聞く

『私の八月十五日～昭和二十年の絵手紙』展



能古博物館だより



「新聞紙を焼いた粉を振りかけるのが精一杯・・・」 (絵)森田拳次さん

～記憶を後世に～

日野原重明さんら35人

高倉健さんの肉声も

- ▽会場＝能古博物館
- ▽会期＝7月31日(金)～12月20日(日)の金、土、日及び祭日。詳細は8ページ参照。
- ▽主催＝(公財)亀陽文庫 能古博物館
- ▽協力＝今人舎(出版社・本社国立市)
- ▽協賛＝「私の八月十五日の会」(森田拳次・代表理事)

◇日野原重明さん(当時33歳)は八月十五日を東京で迎えました。

▽東京大空襲 昭和20年3月9日から10日にかけての大空襲では130機ものB29が2時間半にも及ぶ波状攻撃をかけ、病院付近は一面の焼け野原。その日に取り扱った被災患者は1,000名を越え、病室はもろろん、ロビー、地下室、廊下に至るまで臨時ベッドがつけられました。3名の男性医師と女性医師、そして看護師や看護学生、その他の医療スタッフが総動員されて、5階の病室から地下室まで日に何回も駆け回って治療にあたりました。しかし、治療するにも医薬品は底をつき、爆撃によって受けたやけどには新聞紙を焼いた粉を振りかけるのが精一杯というありさまでした。

▽8月15日 8月6日に広島市、8月9日には長崎市に原爆が投下され、いよいよ8月15日の敗戦を迎えることになりました。

その日の正午近く、病院の職員はチャペルの前のロビーに集まるようにいわれ、全員が天皇陛下の放送に耳を傾け、日本が敗れたことを確認しあいました。戦時中に「大東亜中央病院」に改名していた聖路加国際病院は9月25日に連合国軍に病院建物全部を引き渡し、1953年2月13日に病院の一部である旧館が返還されるまで8年もの間、近くの仮病院での診療を余儀なくされたのです。

※誌面の都合で原文を少し変えています。(編集部)

ご挨拶

能古博物館

ポツダム宣言を受諾して日本の敗戦が決まった昭和20年(1945年)8月15日から満70年。当時を知る世代は減少の一途です。

博多湾物語をメインテーマに掲げる当館は常設展示「海外引揚げの記憶」をさらに確かな史実として若い世代に伝えるため、戦後70年特別企画『見て・読んで・聞く』私の八月十五日〜昭和二十年の絵手紙』展を開催致します。

ご協賛の「私の八月十五日の会」は11年前に1111人の証言をもとに「私の八月十五日〜昭和二十年の絵手紙」を出版しました。同会の母体は「中国引揚げ漫画家の会」です。

ご協力の「今人舎」は新たに103歳の医師日野原重明さん、昨年11月に83歳で亡くなった俳優高倉健さんらの肉声を加え、朗読付きの「絵手紙」にしました。

朗読は筆者自身もしくは親しい方による代読です。高倉さんの朗読は「8月ごろ自ら録音したMDを送っていたのだいた。恐らく生前最後の声」(今人舎)という貴重な肉声です。

会場では長さ約10分の「音筆」を耳に当てて朗読を聴くことが出来ます。皆様のご来館をお待ち申し上げます。

よみがえる70年前のあの日

35人の記憶 一堂に

35点の展示の中から元総理の村山富市さん(当時21歳)、漫画家の森田拳次さん(当時6歳)、俳優の高倉健さん(当時12歳)のパネルをご紹介します。村山さんの文章には森田さんがさし絵を描きました。高倉さんのパネルは漫画家のちばてつやさんとのコラボレーションです。



記憶の奥の奉天

今年も又八月十五日がやってきた。例年のようにその日の古い記憶をたぐりよせると、ラジオから聞こえてくる玉音放送に泣き崩れる大人達の姿、それをとまどいながら見つめる幼い自分にたどり着く。

日本が負けたとは聞かされたものの、子供のごとゆえさしたる危機感もなく、そっと家を抜け出して眺めた日本人街は不気味な程に静まり返っていた。その何時間後のことだろうか。次の記憶は、日本の敗戦を喜ぶ中国人で賑わう奉天の大通りである。ゆっくりと進む馬車の荷台には数人の縛られた日本兵が乗せられていて鞭や棒切れで殴られていた。鞭がしなるたび、見物している中国人のどよめきと拍手があたりを揺るがせるのだった。

森田拳次
(八月十五日を6歳、中国旧満州奉天で迎えました)



私の八月十五日

八月十五日、そのとき私は、熊本県黒石原の陸軍歩兵部隊幹部候補生として軍事演習中に全員集合の命令を受けました。

「愈々ソ連が宣戦布告をし参戦をした」という報告の直後にあわてて訂正、「日本はポツダム宣言を受託全面降伏した」という報告でした。

敗戦で部隊も解散、大分市に引き揚げたのですが私の生れ育った家はもとより大分市の中心部は焼野ヶ原になっていました。

広島、長崎に史上初めて原爆が投下され地獄の思いをさせられた人達。「静かにお眠り下さい。誤ちは繰り返しません」と誓った言葉は今も僕の心のなかに生き続けています。

私の八月十五日を迎える度に当時を思い起こし平和のありがたきを噛みしめています。

村山富市
(八月十五日を21歳、熊本県で迎えました)

展示に登場する35人

特別企画「私の八月十五日」昭和二十年の絵手紙展に登場する35人は次の方々です。

▼今人舎刊「私の八月十五日」①掲載分 敬称略

【敗戦時の年齢が13歳以上】わたなべまさこ(漫画家)、坂井せいごう(漫画家)、花村えい子(漫画家)

【同6歳から12歳】海老名香葉子(作家)、石子順(映画評論家) 絵・ウノカマキリ、さいとうたかを(漫画家)、古谷三敏(漫画家)、高井研一郎(漫画家)、林家木久扇(落語家)、おおさわ匡(漫画家)、黒田征太郎(さし絵画家)、ちばてつや(漫画家)、森田拳次(漫画家)

【同5歳以下】北見けんいち(漫画家)、草原タカオ(漫画家)、キクチマサフミ(漫画家)、浜坂高朗(漫画家)、原田こういち(マンガ・イラスト、デザイン)、バロン吉元(画家)、今長谷はるみ(漫画家) 今人舎刊「私の八月十五日」②掲載分 敬称略

【敗戦時の年齢が13歳以上】日野原重明(医師) 絵・森田拳次、ばんば三郎(漫画家)、村山富市(元首相) 絵・森田拳次、土田直敏(漫画家)、山田洋次(映画監督) 絵・森田拳次

【同6歳から12歳】高倉健(俳優) 絵・ちばてつや、工藤恒美(漫画家)、赤塚不二夫(漫画家)、倉島節尚(国語辞典編集者) 絵・クミタリユウ、江成常夫(写真家)、町田典子(会社経営) 絵・森田拳次、松本零士(漫画家)

【同5歳以下】山内ジョージ(絵文字作家)、上村禎彦(イラストレーター)、那須正幹(作家) 絵・黒田征太郎



日本が戦争に負けたらしいばい!

その日、学徒動員でさせられていた貨車から石炭を降ろす仕事は、何故か休みだった。同級生に寺の住職の息子がいて、寺の近くの池が、格好の遊び場になっていた。僕は黒の金吊り(当時の水泳用の褌)を穿いて、久しぶりの休みに、友達五、六人とその池で遊んでいた。

昼頃、別の友達が「天皇陛下の放送があるらしいばい」と、僕ら呼びにきた。全員で寺へ走っていくと、ラジオから雑音だらけの音声が流れていて、大人たちの何人かが泣いていた。僕には、何を云ってるんだか聞き取れなかった。

友達が言った。「日本が戦争に負けたらしいばい」「えー、降参したとな?」その後何度となく味わった、人生が変わる一瞬。

諸行無常。この時が、初めての経験だったような気がする。

高倉健
(八月十五日を12歳、福岡県遠賀郡香月で迎えました)

◆お詫びして訂正◆
高倉健さんの終戦時の年齢を誤りました。12歳とあるのは正しくは14歳です。資料の確認を怠りました。お詫びして訂正いたします。 編集部

〈中国引揚げ漫画家の会〉 中国から引揚げてきた漫画家有志が「引揚げなどをまったく知らない子どもたちに体験を伝えていこう」と結成。2002年に『中国からの引揚げ 少年たちの記憶』を出版した。メンバーは赤塚不二夫、上田トシコ、高井研一郎、古谷三敏、山内ジョージ、石子順、北見けんいち、ちばてつや、森田拳次、横山孝夫の10人。これに林修一、バロン吉元、山口太一が特別参加した。

次いで2年後に会員が中心になって「私の八月十五日の会」を結成。初版の『私の八月十五日』昭和二十年の絵手紙(2004年7月第1刷)に結実した。

活動は国内に留まらず中国の人民日報出版社の協力で中国語の『私の八月十五日』(我的八月一日)を出版し、日野原・森田コンビの作品は「医院的記憶」として掲載された。

さらに昨年6月、「いまやっておかないと引揚げ体験は永久に消えていく」と『中国からの引揚げ少年たちの記憶』を原典に、「今人舎」から「もう10年もすれば・・・消えゆく戦争の記憶」漫画家たちの証言(定価千八百円・税別)を出版した。メンバーのうち2008年に上田トシコ(享年92)、赤塚不

二夫(享年74)、2010年に山口太一(享年76)が世を去った。

☆ 〈今人舎〉 主に学校、公共図書館向けの児童書を手がける出版社。今回の「朗読プロジェクト」は、「決して忘れてはならない戦争の記憶を戦争体験者本人の声で語り継いでいきたい」(稲葉茂勝社長)との願いから始めた。



《本の紹介》今人舎の「私の八月十五日」①、昭和二十年の絵手紙(本体3,200円+税) ②「右」と「私の八月十五日」②、戦後七十年の肉声(本体2,800円+税)の2冊 ③「いづれも発売中」①の表紙絵は森田拳次さん ②は黒田征太郎さん。

〔お断り〕 日野原重明、村山富市、高倉健、森田拳次各氏の作品は、「今人舎」と「私の八月十五日の会」の許可を得て掲載しました。紙幅の都合で一部、補足、割愛しています。ご了承ください。

編集部

「北前船」繁盛記

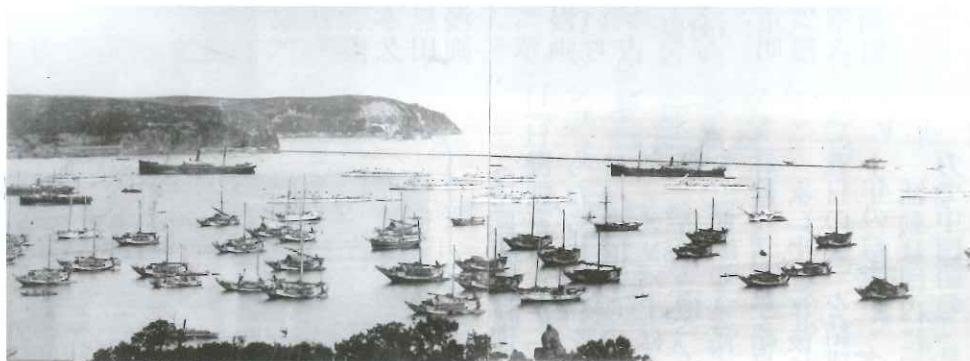
小樽市総合博物館

学芸員 菅原慶郎

前号では、江戸時代に北海道と福岡をつないだ筑前廻船(五ヶ浦廻船)について具体的な事例を挙げて紹介した。本号では、明治時代に北海道と大阪を日本海航路で結び、国内流通の一翼を担った「北前船」を紹介する。

現在「北前船」は、中学校の教科書でも紹介されるほどメジャーな歴史用語であろう。こうした背景には1980年代に、淡路出身の廻船商人高田屋嘉兵衛をモデルとした司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』が人気を博し、さらにその所有船「辰悦丸」が復元され、大阪から北海道の江差まで航行したことが影響すると見られる。この頃から「北前船」は、歴史用語として定着したようである。さらに日本史の研究業界で1970年代以降、日本海海運史研究が大きく進展したことも影響する。

「北前船」は、大まかに18世紀後半から19世紀にかけて、日本海・瀬戸内海沿岸を主な活躍の場とした「買積」(航行する船主が商品を各寄港地で売買し、その価格差でもうける形態で、運賃をもらって物を運ぶ「運賃積」と対比される)を行う運行形態の和船(日本独自に発達した木造船)を指すとされる。興味深いことに「北前船」という呼称は、畿内周辺



「北前船」と小樽港 明治36(1903)年(小樽市総合博物館所蔵)

でのみ使用され、他地域においては「弁財船」、あるいは「弁才」と呼ばれていた。ここから、「北前船」という呼称自体が最近になり定着したことがわかる。その「北前船」が明治時代以降の地域に与えた影響を、北日本随一の経済都市となった北海道の小樽を事例として、とりわけ物流の視点から考えてみたい。当時北海道は、本州方面から開拓移民が大量に入り込み、沿岸部から急速に内陸部の開発が進みつつあった。人的な移動とそれに伴う物資の供給には「北前船」が一役買った。それが同時に、小樽港発展の大きな礎となる。

例えば、米の生産がほとんど不可能であった明治時代の北海道に、本州方面から「北前船」が米を運んでくることにより、港町小樽では精米業や酒造業が大きく発達する。この事情は、一般に「米どころの酒がうまい」といわれる本州以南とは明らかに異なる特色である。明治39(1906)年の『日本帝国港湾統計』によれば、小樽は全国で横浜や神戸に匹敵する米の移入港であった。あわせて明治42年の『小樽区外七郡案内』によると、米を主要な原料とする精米工場と酒造業者はともに20社にものぼる。「北前船」により、港町小樽は「北海道の米どころ」となったのである。

米の移入に対し北海道からは、本州の水田や畑へ播くニシンを中心とした膨大な量の魚肥が運ばれた。ニシン漁は小樽でも大変盛ん

で、市内小学校校長の日記である「稲垣益穂日誌」によれば、明治42年4月17日「塩谷村、昨夜ヨリノ漁獲高、凡(およそ)五千石ナリト云へバ、金二積リテ、六・七万円ナル(以下略)状況であったという。500戸ほどの塩谷の集落で、一晩で今の価格(米換算)にすると、7億円もの巨大な利益になった。



小樽の倉庫群、明治40(1908)年頃(小樽市総合博物館所蔵)

このように、米と魚肥という商品から北海道と本州以南を見ると、明治時代以降も、海運を通じて構造的に密接な関係にあったことがわかる。さらに物流の拠点となった小樽には、海岸線に様々な商品を出し入れするための倉庫がびっしり立ち並んだ。現在でも少なくなったものの、明治時代に建てられた倉庫が残されており、当時の面影を探ることができ

る。「北前船」に続いて小樽は、明治13(1880)年に北海道で最初の鉄道が敷設された。それによって海産資源のみならず、北海道の内陸部に眠る石炭の本州方面への供給拠点ともなった。鉄道の開通・延伸によって内陸部への人や物資の輸送も容易となる。明治時代の小樽は、「北前船」と鉄道を通じて、北海道内と本州をつなぐ「ハブ」として大きく機能したのである。

菅原 慶郎(すがわら よしろう)1987年、北海道札幌市生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了(日本近世史専攻)博士(文学)。2012年から小樽市総合博物館の歴史分野担当の学芸員として、近世の小樽市域をはじめ、広く北海道や東北地方の流通経済について研究している。

全国博物館長会議

今年度の全国博物館長会議は6月10日(水)、東京・虎ノ門の文科省で開かれた。アジア各国の観光客が増えており、展示やチラシの文章を中国語などに翻訳する作業の重要性が指摘されたほか、公施設が劣化の時期を迎えたいわゆる「40年問題」、超高齢化時代になり寄贈品が増える一方で、収蔵庫が満杯で折角の貴重な資料を受け入れる余地が少なくなった問題などが報告された。



また、学芸員のほかに企画員を置き、地域と観光振興の両面に目配りしている事例(土佐山内家宝物資料館)や、ボランティアの育成・運営では「ほったらかしていたら自主性が高まり、110人に増えた」(府中市郷土の森博物館)などの報告があった。

日本海海戦110周年

博多湾沖で洋上追悼式

海上自衛隊のイージス護衛艦「あしがら」(排水量7,750ト)に一般客と関係者約550人を乗せて5月30日、日本海海戦110周年記念の洋上追悼式

が体験航海を兼ねて博多湾沖で行われた。

同海戦記念大会(会長・末吉紀雄福岡商工会議所会頭)の主催。毎年恒例の行事だが、今年は1905年(明治38年)5月27日にロシアのバルチック艦隊と旧日本海軍連合艦隊が沖ノ島北方海域の日本海で戦火を交えて110周年になる。後援する宮崎宮で神事を行い、小雨の中「あしがら」に乗艦した参加者は能古島を左に見ながら玄界島西方の海域に到着、両国の戦死者を悼み花束と供物を海に投下した。

占領下の検閲、テーマに

劇団「シヨーマンシップ」8月公演

亀井南冥劇でお馴染みの劇団「シヨーマンシップ」は、戦後70年プロジェクトと銘打ち、「奪われた手紙」(福岡民間検閲局)を8月4日(火)から30日(日)まで、本拠地の甘棠館 Show 劇場(福岡市中央区唐人町)で上演する。

テーマは占領下の日本で実際に行われた出版、郵便物の検閲。占領軍総司令部は新聞記事などを事前に検閲して占領政策の批判などに制限を加えた。個人の手紙類も開封して内容をチェックした。多数の日本人が検閲作業に従事したが、物語はそのひとりを中心に展開する。

「欧文タイプライター募集」の新聞広告が縁で採用された元特攻隊員の主人公は、以前は敵だった米軍の下で検閲をやることに罪悪感を持ち、やがて検閲によって削除された言葉や手紙たちに追い詰められる夢をみるようになり……。

発売中の前売りチケットは一般3千円、学生2千円。当日は3百円プラス。詳しくはシヨーマンシップ(電話092・716・3175)へ。

稿 夜光虫のギラギラ

寄 友の会員・野村 武

博多つ子にとって、能古島は志賀島とともに博多湾内の遊びの島だった。その能古島の夜の浜辺で体験した「夜光虫のギラギラ」は、強烈な思い出である。

昭和30年ごろの夏、私は数名の友人と能古島にキャンプに出掛けた。姪浜からフェリーで渡って、西へ10分あまり歩くと小学校があった。南側の運動場に出ると、その先にはきれいな砂浜が続き、海が広がっていた。浜辺に持参の6人用テントを張った。

遊びは、海に入って泳ぐしかなかった。博多湾の潮の流れは時計と反対回りで、意外に速かった。足下は、しばらくは砂浜の砂のイメージだったが、すぐに丸い砂利石の感触に変わった。

あたりが暗くなると、向こう岸の姪浜から博多の中心街にかけて、きれいな夜景が見られた。体を沈めて泳ぎだすと驚いた。手の先から腕にかけて、水を掻くたびに、「ギラギラ」と夜光虫が光った。気がつくといく周りにカラダ全体がギラギラで、光り輝いていた。ちよつと気色の悪い思いもした。友人もみんな初めての体験だった。

翌朝、海岸の小舟に人だかりがあつて、漁師さんが取れたての魚を住民に分けていた。30才あまりの青魚で、おいしそうだった。翌年もまた同じ場所でもキャンプをした。同じように夜光虫の歓迎を受けた。博多の近くにこんな強烈な思い出を作ってくれたところはないと思う。いまはどうなっているだろう。博多湾も昔はきれいなものだった……。(西日本新聞社社友・熊本県立大名名誉教授)

入館者 2,000人突破

26年度2,099人——最後の追い込みが功を奏して21年度以来の入館者2,000人突破を達成しました。25年度に比べると507人増えました。

率にすると31.8%増。驚異的な数字です。前号でも触れたように団体割引制度の見直し、コンサート、映画会などのイベント開催が後押ししてくれました。友の会の会員の皆様の利用が増えたのも好材料です。

▽**新年度も好調** 急逝した米倉斉加年さんの絵本を取り上げた『大人になれなかつた弟たちに…』展を新年度早々から別館で開催、集客が見込める5月は連続開館に踏み切り、大型連休期間中の安定した空模様にも助けられて、この8年間で初めて月間入場者が500人を超え、502人を記録しました。

▽**ミュージアムウィーク** 本年度からスタンプリーなどの行事に初参加、5月16日(金)～24日(日)の9日間で209人の方々が来館しました。

空き家の活用など話し合う

2015能古島未来フォーラム

2015能古島未来フォーラム(主催・能古島みらいづくり協議会)は4月26日午後1時半から能古公民館で開かれた。昨年2月に続く2回目の開催。

今回は福岡市住宅都市局の担当者が出席して懸案の空き家問題を「市街化調整



区域における定住対策」として語った。担当者は「志賀島地区や北崎校区では能古島の取り組みを参考に空き家調査を行った。能古島の取り組みは定住対策のモデルケースになる可能性がある。」と明かした。

大洋映劇(東中州)で上映

『なつやすみの巨匠』

“オールハカタ”で全力投球

10歳の少年と能古島が主役の映画『なつやすみの巨匠』(中島良監督)は、全国に先駆け7月11日(土)福岡市・東中州の大洋映画劇場で一般公開された。企画・脚本の入江信吾さん(39歳)は福岡市早良区で育った博多っ子。県立修猷館高校時代に映像制作の魅力に目覚め、神戸大学経済学部を卒業後、テレビ朝日系列のドラマ「相棒」で脚本家の地位を築いた。

「能古島は子どもの頃の思い出が一杯詰まった島です。この島を舞台に映画を制作するのが高校時代からの夢でした」と語る。

地元出身の人気タレント博多華丸を少年の父親役に起用。博多弁がふんだんに飛び交い、シンガーソングライターの井上陽水が1980年代に発表した「能古島の片想い」を主題歌に流し、未だに昭和のカラーが残る島の日常を取り込んだ。

入江さん、中島監督らはオールハカタの応援態勢をゼロから立ち上げた。(株)新出光など多数の地元企業を協賛に取り込み、渡船の船長役にはワンカットながら高島市長が登場した。島内ロケでは多くの島民がエキストラで参加した。

公民館でも試写会

6月20日夜、島の公民館で試写会が行われ、制作側の入江、中島両氏と出演した

子供たちが挨拶した。会場は小学生から高齢者まで約150人の観衆で満員の盛況。終了と同時に喝采の大きな拍手が起った。7月3日には2度目の試写会が再び同館で開かれた。

特別試写会 福岡市博多区の「あじびホール」(アジア美術館内)に関係者を招き、6月23日の午後、2回に涉って開催された。

新入会員の皆さん(敬称略)

「協賛法人」(株)内藤工務店(株)ふく福サービス、(株)ミズ、社団法人あおば研究所、(有)福岡住宅流通サービス、(株)旭工務店、(株)アサヒホーム、(株)ワイエムフーズ
「協賛個人」出光豊、林十九楼
「友の会」阿部芳文、石橋慶二、エスペランサ税理士法人、高木良助、田中浩子、藤井鉄夫、和才雅宣

主なグループ来館

(平成27年2月20日～平成27年6月6日)

▽「2月」▽20日(金)佐賀県名護屋城博物館ボランティア17名「3月」▽21日(土)能古映画サークル「東勝吉99才孤高の無名画家」上映会82名▽26日(木)能古老人クラブ観桜会55名▽26日(木)姪浜よかおとこの会7名▽28日(土)原土井病院青葉会40名▽29日(日)句会「光円」32名「4月」▽17日(金)能古小学校新任教員7名「5月」▽8日(金)能古小学校5・6年生24名▽17日(日)西区まるごと博物館推進会41名▽23日(土)姪浜よかおとこの会「あこめの会」72名「6月」▽6日(土)郵便局(西二会)31名

能古博物館協賛ご寄附及び友の会(継続・新規)会員

(平成27年6月末現在)

協賛ご寄附

(法人)

- 医療法人 笠松会 有吉病院
税理士法人 エム・エイ・シー
エムサービス(株)
医療法人社団 江頭会 さくら病院
(株) サンコー
(株) 内藤工務店
(株) ふく福サービス
(株) ミス
(株) CDS
(株) 筑紫不動産
西日本シティ銀行 土井支店
医療法人 西福岡病院
医療法人 原三信病院
(医) 博仁会福岡リハビリテーションシオン病院
社会医療法人 原土井病院
(有) 福岡住宅流通サービス
(株) 旭工務店
(株) アサヒホーム
(株) ワイエムフォーム
(株) ホームケアサービス
(株) メディカルアシスト青葉
医療法人 恵光会 原病院
浄満寺

(個人)

- 足立晴道 石野智恵子 出光豊
出光芳秀 上野道雄 上崎典雄
柏木重人 亀井准輔 久我篁子
久保千春 毛戸彰 朔島元則
島塚祐弘 鈴木友和 添井雅貴
多々羅節子 寺田裕隆 戸井雅貴
仁保喜之 原裕介 原寛
林十九楼 舟越茂義 増田康治
翠川文字 (敬称略、順不同)

協賛ご寄附のご案内

法人10万円×口数
個人10万円×口数

1.郵便振替え 017300960970
公益財団法人 亀陽文庫

2.銀行振込み
西日本シティ銀行 土井支店
普通 0551459
公益財団法人 亀陽文庫

友の会会員

注:敬称略・五十音順
数字は会員歴(年数)

- 明石幸 合馬武久 小坪健代子
秋山峻治 大石由美子 小堀瑠伊子
秋吉包雄 大石恭仁子 田代朝子
秋吉芳正 大智照子 原和子
麻生芳正 大塚健治郎 原盛子
阿部浩文 大野彩子 原一男
阿部優子 小庭和子 原善八
有川優子 荻原美枝子 田中善子
井浦通泰 奥田安孝 田中浩子
池田修三 小倉智文 田中丸善彦
池田幾生 鬼崎雅子 田中丸善彦
池見葉満代 小野崎徹 田中丸善彦
石橋慶二 石橋延枝 塩田康文
石橋正治 石橋善弘 佐藤郁也
石橋美感行 泉建志 佐藤郁也
伊倉幸裕 板倉修二 佐々木三子
市丸喜郎 河野真二 寺岡直彦
井出美子 河邊鐵夫 津野光詢
稲葉英彦 河村敬一 津野光詢
井上昭義 木血敦代 玉村英彦
今永一成 岸洋子 中島謙子
今村幸枝 北原君子 中島謙子
今村幸枝 北原君子 中島謙子
今村幸枝 北原君子 中島謙子
岩城通宏 鬼頭鎮三 中島謙子
岩清水由紀子 岐部龍信 中島謙子
上瀧玲子 木山忠信 中島謙子
上田恒久 木山啓子 中島謙子
上野聖満 上野聖満 中島謙子
浦田裕記子 浦田裕記子 中島謙子
江崎小二郎 江崎小二郎 中島謙子

友の会入会の案内

- (1) 振込み料は当館にて負担致します。
(2) 会費の納入確認後、会員証とコーヒー券をお送り致します。
(3) 会員証の有効期間は1年と致します。
(4) 入館時に会員証(同伴1名まで有効)を受付けに提示下さい。ご入館は随意で回数制限はなく無料です。
(5) コーヒー券で挽きたてのコーヒーを博多湾を見ながらお飲みいただけます。
(6) 機関誌「能古博物館だより」を各年度3回(予定)発行、お届け致します。随時ご意見を歓迎します。但し誌面の都合で掲載を見送る場合はご容赦願います。原稿はお返し出来ません。必要なら事前にコーヒーをお願い致します。
(7) 館が企画する催物のご案内に参加費の割引を致します。



アクセス

西鉄バス

- ・JR博多駅 博多口正面Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行: 約50分
- ・天神 三越前1Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行: 約30分

市営地下鉄:「姪浜駅」下車 乗り継ぎ

- ・西鉄バス姪浜駅 北口
98番 能古渡船場行: 約12分
- ・タクシー: 約 8分

市営渡船(フェリー)

- ・姪浜-能古島間: 約10分
- 能古島渡船場より博物館まで
- ・徒歩: 約10分
- ・アイランドパーク行き西鉄バス停
「能古学校前」下車、徒歩(下り坂)約3分

問合せ

姪浜旅客待合所 TEL 092-881-8709
能古旅客待合所 TEL 092-881-0900

開館日/毎週 金曜・土曜・日曜と祝日

※団体の場合は休館日にかかわらずご相談ください

★ 10月は全日開館を予定しています。

(注) 冬季(12月~1月)は、年末年始及び展示物入れ替えなどで長期休館を原則としています。御用の場合は事前にお問い合わせ願います。

開館時間/10:00~17:00(入館16:30まで)

入館料/大人400円・高校生以下無料

※団体20名以上2割引

	能古 発	姪の浜 発
1	◎05:00	◎05:15
2	06:00	06:15
3	06:30	06:45
4	07:00	07:15
5	07:30	07:45
6	08:00	08:15
7	09:00	09:15
8	10:00	10:15
9	11:00	11:15
10	12:00	12:15
11	13:00	13:15
12	14:00	14:15
13	15:00	15:15
14	16:00	16:15
15	17:00	17:15
16	17:30	17:45
17	18:00	18:15
18	18:30	18:45
19	19:30	19:45
20	20:15	20:30
21	20:45	21:00
22	21:45	22:00
23	◎22:45	◎23:00

◎印は日祝日運休 2013年11月現在

渡船場からアイランドパークへの西鉄バス時刻表(平成27年6月現在)

渡船場前発(能古学校前まで約2分)

時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	18
平日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	
土曜日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	
日・祝日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	00

アイランドパーク発(能古学校前まで約8分)

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
土曜日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
日・祝日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	38

※ 繁忙期はバス、渡船とも臨時便が運行されます。



公益財団法人 竜陽文庫

能古博物館

〒819-0012 福岡市西区能古522-2 TEL 092-883-2887 FAX 092-883-2881
http://nokonoshima-museum.or.jp E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp